

てんさい「H154」

1 特性の概要

(1) 来歴

てんさい「H154」は、ベルギーのセス・バンデルハーベ社が育成した二倍体単胚の一代雑種系統である。セス・バンデルハーベ社が育成した二倍体単胚雄性不稔種子親系統「MS 102」と二倍体多胚花粉親系統「POL106.007」を交配して育成した。

平成 29 年にホクレン農業協同組合連合会が輸入し、平成 30 年から令和 3 年に、北見農試、十勝農試、北海道農産協会（日甜、北糖、ホクレン）において輸入品種検定試験を、北見農試、十勝農試、中央農試において各種特性検定試験を行った。また令和 2 年から令和 3 年に、全道 3 か所において現地検定試験を行った。

(2) 特性

「H154」の根重、根中糖分、糖量は「パピリカ」と比較して、ほぼ並である。また、褐斑病抵抗性が「パピリカ」の“やや弱”に対して“中”であり、「パピリカ」より強い。そう根病に抵抗性を持ち、その他の病害抵抗性も「パピリカ」並である。

調査年次	平成 30 年, 令和元, 2 年		
品種・系統名	H154	アマホマレ (標準品種)	パピリカ (対照品種)
根重 (t/10a)	8.34 (112)	7.44 (100)	8.19 (110)
根中糖分 (%)	16.28 (96)	16.97 (100)	16.33 (96)
糖量 (kg/10a)	1359 (108)	1262 (100)	1338 (106)
抽苔耐性	強	強	強
そう根病抵抗性	強	弱	強
褐斑病抵抗性	中	中	やや弱
根腐病抵抗性	やや弱	弱	やや弱
黒根病抵抗性	中	中	中

注 1) 根重、根中糖分および糖量は、北見農試、十勝農試および北海道農産協会(3か所)ののべ20か所平均で、括弧内は「アマホマレ」に対する百分比。

2) 特性検定は抽苔耐性(北見農試、令和2,3年)、そう根病抵抗性(北見農試、平成30~令和3年)、褐斑病抵抗性(十勝農試、平成30~令和3年)、根腐病抵抗性(十勝農試、平成30~令和3年)、黒根病抵抗性(中央農試、平成30~令和3年)の成績。

(3) 長所及び短所

長所 1 褐斑病抵抗性が“中”である。

(4) 用途

砂糖原料用

2 候補理由

平成 22 年に北海道優良品種に認定された「パピリカ」が普及して以降、てんさい作付け農家戸数およびてんさい作付面積は減少傾向であったものの、てんさいの総生産量は、ほぼ一定量を維持してきた。その理由の一つとして、てんさい品種の収量性の向上が挙げられる。「パピリカ」はこの収量性の向上を代表する多収品種であり、近年は主力品種として 1 万ヘクタールを超えて栽培され、てんさいの安定生産に大きな役割を果たしてきた。さらに「パピリカ」は、それ以前の主力品種にはなかったそう根病抵抗性を持つことから、北海道内で被害が顕在化して行く中で、そう根病対策としても重要な役割を果たしてきた。

一方で、「パピリカ」は褐斑病に弱く、夏期の高温で発病の進展が早くなって防除開始が遅れたり、多雨の影響で防除機械が圃場に入れずに防除間隔が長くなったりすると、褐斑病の発生が広がりやすく、多発年には大きな被害が発生することが問題となっていた。このことから、「パピリカ」の多収性およびそう根病抵抗性を維持しつつ、褐斑病抵抗性を向上させた品種が必要とされていた。

「H154」は、「パピリカ」並の多収で、また褐斑病抵抗性は「パピリカ」の“やや弱”に対して“中”である。このため、褐斑病の発生が「パピリカ」より広がりやすく、天候不良年などの病害多発時の被害が軽減されることが期待できる。また、「パピリカ」同様にそう根病に抵抗性を持ち、その他の耐病性も「パピリカ」並である。

以上から、「H154」を「パピリカ」に置き換えて普及させることで、てんさいのさらなる安定生産に貢献できる。

3 普及

(1) 栽培適地

北海道

(2) 普及見込み面積

14,000ha（令和 2 年作付総面積 56,749ha 24.7%）

(3) 北海道農業試験会議（成績会議）における判定

普及奨励事項

4 その他特記事項

1) 根腐病抵抗性が“やや弱”であるため、適切な防除に努める。

5 参考データ

なし

(写真)

てんさい「H154」

(令和3年10月21日撮影 北見農業試験場 直播栽培)

播種日5月7日、畦幅60cm、株間23.8cm



「H154」



「パピリカ」(対照品種)



「アマホマレ」(標準品種)